

第4章

—私の短歌から— さよなら福島町より

文協いろは第27号（平成十八年三月一日発行）より

珍しく本人が、自分の短歌についてその思いを語っています。

わが町が一島の町なりしこと今年までなり合併決まりて

昨年うづの福島町報「ふくしま」の四月号に載った作品である。

そして今年、平成十八年一月一日より福島は新「松浦市」の中の福島町になった。

合併あひにふるさとの町は新しきの内となるなにか寂しき

合併が今後の福島町発展への道であることをうづ諾いつつも小さな島が村から町になり五十四年間の歴史を築きながら、時代の流れで今までの町は閉町となる淋しさ、名残惜しさが、なにかさびしきと私に思わせるのである。

若きらは知らず過ゆく無縁墓炭鉱ありし島の悲話秘む

私の住んでいる日の浦から福島港へ向かう道路の途中、右手に特別養護老人ホーム「いろは島荘」があるが、その土堤下に無縁仏のお墓が建立されている。以前は道路より低い所にひっそりとあったが、いろは島荘が出来上がったのちに町が新しく建て直している。

生け垣が茂って道路からちよっと見えにくいが、いつも季節の花が誰かの手によって供えられているようだ。

明治中期、福島に炭鉱産業が始まった頃、最も早く炭鉱地帯となりその集落もあった日の浦、現在の様子からは想像もつかないが残された写真などでどうにか偲ぶことができる。

当時は島外からも多くの人たちが働きに來ていたが、その死亡後、身寄りが無い人や身許不明の人たちの冥福を祈るために、この無縁仏の墓が建てられたと聞いている。



福島町・日の浦炭鉱の昔（ネットの「アトリエ仕事日記」より）

第三の門出と言ひぬ閉山の島去る人は引揚げ者にて

昭和四十七年九月、町内のすべての炭鉱産業は終わりを告げた。炭鉱で働いていた人たちが、毎日つぎつぎと家財道具を積み上げた車と共に福島を去って行く姿を見送った。その中の親しかった人の言葉である。敗戦で外地から引揚げ、第二の門出と思ったのである。だが閉山となりやむなく又、新しい職場を求めてこの島を去る人は「第三の門出」と言い自分自身を励ましたのである。

炭鉱の閉山で町は急速に過疎になった。

炭鉱は今無く島より田植え済めば出稼ぎにまた人ら出ててゆく

それまで半農半漁と炭鉱の島だったので、町内の人々の中には炭鉱関係の仕事に就いていた人たちも多かった。

この人たちも働く場を得るために都会の工事場などへ出稼ぎに出て行ったのである。

廃坑に湧く水あれば水源の一つとなせり島の暮らしは

福島には水資源となる川がない。昔は各集落で湧き水や掘った井戸の水を生活用水としていたけれど、町報「福島」最終号の福島町五十四年間のあゆみによれば、昭和三十一年十月から上水道完全給水開始とされている。

それでも雨が長く降らない時には断水、時間給水となることが多かった。すでに廃坑となった場所の地底からも水を汲み上げるための町当局の努力が続いていた。そしてその後も、

節水の呼びかけ毎夜に島内の放送を聞く雨乏しき秋（平成七年作）

福島大橋が完成し、開通したのは昭和四十二年の秋だった。それから丁度三十年の歌であるが、

亡き父らひたすら待ちし島からの架橋は成りてすでに三十年^{みとせ}

私の父は、この夢のかけ橋と言われた福島大橋を見ることがなく架橋五年前に亡くなった。生前、この架

橋を切望する言葉を何度聞いたことがあるだろう。

福島住民の永年の夢がついに現実になった福島大橋、私自身も渡り初めたあの日の感激を未だに忘れ得ない。

架橋のお蔭で全くの離島でなくなったことの安心感と便利さに今も感謝の思いが湧く。

わが島もふるさと祭り鐘の音の聞こへて浮立の行列が来る

毎年ふるさと祭りが開催されるようになって、昨年の秋は第二十回を数えた。旧福島町としては最後の祭りであった。今後も変わらぬとは思うけれど、いや、もっと盛大になることだろう。

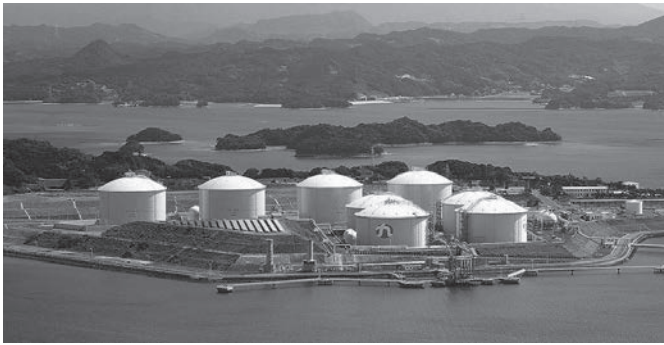
船を待つ岸より眺むるわが島の岬明るしガス基地灯りて

かつての福島炭鉱の跡地からボタ山や立坑の建物が消え、やがて企業誘致された九州液化瓦基地の白い巨大なタンクが並ぶのを見るようになった。

福島から町外へ出かける場合、今は福島大橋を渡ることが多いが、時には釜港から対岸の浦の崎まで定



福島大橋



LPガス基地(九州液化瓦斯福島基地株式会社のHPより)



日ノ浦の裏の海(伊万里湾、人形島が見える、手前は塩田跡の水田)

期船を利用する。冬の夕暮れは早い。帰りの船を待ちながら浦の崎から眺める福島に早くもあかあかと灯が点っている。九液ガス基地の灯であり、思いがけなく美しく暖かい夜景であった。

そして、その後、福島国家石油ガス備蓄基地も誘致され、昨平成十七年十月より操業が開始されている。白い巨大タンクが八つ並んだ基地の写真を町報で見たけれど、対岸の浦の崎からの夜景はまだ見えていない。



夫の退職後の新居予定地(昭和57年頃)



夫の退職後の新築時の地鎮祭



新居、完成



新居の庭で